



日時：平成26年9月14日（日）

会場：大阪府鍼灸師会館 3 階

講師：日本鍼灸研究会代表 篠原 孝市 先生

『医道の日本誌』2014年8月&9月臨床に活かす古典「No.28 選穴」&
「No.29 要穴 その1」のお話から

鍼灸の経験というのは、つぼを使う経験。つぼを選ぶ経験というところに行きつくんじゃないかなという風に思いますねえ。こちらでこう技をかけて、相手をひっくり返すというんじゃないで、相手の状態に基づいて、それを観察して、それを運用すると上手くいくというぐらいでいいんです。ですから腕が上がるとか上がらないとかじゃなくて、いかに相手のことを上手に観察、つまり診察してるかっていうことが、つぼを選ぶっていうのに深く関係するんじゃないかなっていう風に思うんですね。

選穴というのは『素問』や『靈樞』の後で二つの方法をとりました。というのは（中国の）医学は二つの方法を取ったからで一つが『明堂』といわれる「経穴書」が出来たってことです。それからちょっと遅れて出たものと思われませんが『難経』という本が出来たという。この二つが出来たという事により選穴という方法が大きく変わりました。

『明堂』っていうのはご存じのように『甲乙經（鍼灸甲乙經：しんきゅうこういつきょう）』とか、引かれてるものしか残っていないので原型がどうなっていたのかは、わからない。原型は、二つの説があって、一つは主語（つぼの名前）、それに場所（部位）を書いて、その下にどういうもの（病症）が治るかって書いてある。こういう構想だったって考える人が居る。それからそうじゃなくて場所と主治穴は別々に書いてあったという人の二通りあるんですね。

『難経』はご存じのように六十九難、五腧穴の運用というのが有名ですね。主に『難経』の選穴論というのは六十九難、それから七十五難の五行の相生、相剋に基づく選穴ですね。それから六十八難。全部五行説がもとになっていますので、五行説をやらない人には非常に人気がない。戦前の経絡治療の人たちがやった（難経の）「六十九難」に対する非常に突っ込んだ研究というのは非常に特異なものだと思いますね。だけどそれをやったおかげで、初めて組立が大事だとか、あるいは陰経に対して陽経の組み合わせが大事なのだとかがわかる。

・六元正紀大論篇第七十一 第十八章14節～第十九章（第十八章から講義内容を抜粋）

“帝”は、言われた。温や涼という状態の季節の時にはどうなのか。

“岐伯”は答える。六気（主気、客気何れも）が熱の時期には、熱の薬をやってはいけない。寒も同じ。涼も同じ。温も同じ。客気の間氣（かんき）と主気の六気が同じ熱と熱、寒と寒、涼と涼、温と温になるときにはこの原則にしたがうこと。客気の間氣と主気の重なった六気が同じものでない時、たとえば主気の第一気が厥陰風木（温）であって間氣が陽明燥金（涼）そういう風な状態であれば、二つが同じものではないので、その原則は必ずしも全部守る必要はない。必ず慎重にこの判断を分かťこと。

“帝”は言われた。それは、わかったが犯すというのは、どういう風なことなのかと。

“岐伯”が答える。客気と主気が一致しない時には、主気の方を中心に考えればいい。

客気の太過にしたがつて、つまり客気がどういう状態か、主気が何なのかという風なことを考えて、原則に従わない治療が出来る。たとえば熱の時期に熱を加えるということ。熱薬や寒薬を季節を考えながら薬を処方する。治療の限度というのは期が季節を考えながら薬を処方する。治療の限度というのは期が平らかになった状態が限度だ。それ以上の治療も、以下の治療もしてはいけない。やりすぎというのは間違つた治療だ。時期に応じてちゃんと気がやってくるということをまず知っておく必要がある。季節の五運と六気がどういう風にくるかということを知っておけば季節の法則性（天信）を失うことはない。季節の氣というものが太過になると、それを抑えるための氣が働く。それを勝（しょう）という。勝の状態があんまりひどくなってくると、それをまた復元するものがあり、それを復（ふく）という。六気の状態というものを十分に知つて、しかもそれを抑えたりあるいは、そのまた逆をやつたりするような、勝とか復とかいうものを下手に助けることによってバランスを崩すということをしてはいけない。そのようにしないということが最高の治療（至治）である。

＊間氣（かんき）とは、司天、在泉以外の六気。初の氣、二の氣、四の氣、五の氣の事。

＊次回は、【六元正紀大論篇第七十一第二十章】から始まります。

（素問勉強会世話人 東大阪地域 松本 政己）